令和７年度小値賀町総合教育会議 議事録

■開催日時：令和７年７月 29 日（火） 午後2時 30分～午後3時55分

■開催場所：小値賀町役場 3階第四会議室

■出 席 者：小値賀町長 西村 久之
教育長 中村 慶幸
委員 升水 裕司
委員 中村 好秀
委員 浦 いせ子
委員 横山 明美
（事務局）教育委員会 牧尾次長、山元班長、坂井係長
未來創造課 升水課長、田川班長

1．開会挨拶

西村町長：本日は忙しい中、総合教育会議にご参加いただき、また日頃から教育行政に関して、格別のご理解とご協力をいただき、心から感謝申し上げる。 本格的な小中高一貫教育が始まって 17 年が経過し、着実に良い方向で深化していると認識している。先日、高校生の提案型発表会に同席させていただき、提案もさることながら、提案に対する質問に対しても的確に答弁しており、大変感動した。昨年から第５次総合計画がスタートしたが、今回、発表した生徒の方から「発表内容を総合計画に盛り込んでもらいたい」という提案があった。総合計画の前期計画は５年間で随時見直しを行うので、その計画の中に盛り込んでいきたいと考えている。今後とも、様々な面でご協力をいただくことになろうかと思うが、よろしくお願いする。

2．議題説明

田川班長（進行）

本日の協議事項に入りたいと思う。協議事項は（1）北松西高等学校の存続について、（2）ふるさと留学の体制整備についての2点である。教育委員会から説明をお願いする。

牧尾次長：（1）北松西高等学校の存続について （2）ふるさと留学の体制整備については関連性があるので、併せて説明する。

※資料に沿って説明。

田川班長：ただいまの説明に対して、質問・ご意見はないか。

3．質疑応答・意見交換

升水委員： 資料で最後の児童生徒数の推移で「予想」というところだが、小値賀中学校から北松西高校への進学率が 60%で算出されたとあった。令和 8 年度は、中学生が全校生徒で 40 人という数字が記載されているが、これはどういう意味か。 全校生徒が北松西高校に行った時に、全体で 22 人ということになるのか。60%をかけて 22 人ということか。

牧尾次長：令和 7 年度の現在の中学 3 年生が 12 名。12 名のうち、6 割の生徒が北松西高校に進学すれば、0.6 をかけると 7 名になる。この 7 名が北松西高校に進学するということ。それらを合わせて、全校生徒が何人になるかということを書いている。

町長:先日の東京での合同説明会に参加したが、特に e スポーツ科のような学科を持つ高校に多くの生徒が集まっていた。他の学校にない特徴的な学校に生徒たちが多く集まっていたようだ。なぜこんなに人が多いのかと不思議に思ったが、隣の学校には誰もいなかった。そんなにゲームに興味がある生徒がいたのかと感心した。

教育長：大阪の合同説明会には、佐賀県の唐津青翔高校は来ていなかったが、地域によってターゲットを関東にするか関西にするかがあるのだろうと思う。大阪会場には東京の 2/3 程度しか参加校はいなかった。地域みらい留学プラットフォームが会場の動線を決めているが、目当ての学校に真っ直ぐ行く親子もいた。大阪は四国が近いためか、水産高校が多かったように思う。

町長：全部の学校を見たわけではないが、130校程度が参加していた。生徒が直接説明しているところもあった。プレゼンテーションは北松西高校の生徒もすごかった。

升水委員：先日の議会の時も、答弁がスラスラと答えていた。やはりあれを見ると、これは北松西高校の一部生徒かもしれないが、最近の子どもたちは人前で説明するのが上手で 少人数の強みではないかと思う。あれが高校の魅力だと思うが、どうやって PR すればいいのか分からない。

町長：隣のブースには、北海道からの先生方が何人かいて、懇親会で話していた時に、「北松西高校の生徒さんはすごい」と言っていた。「コミュニケーション能力をどこで鍛えているのか」と言われた時に、「地域探究で鍛えている」と伝えた。自分も本当にすごいと思った。後ろから見ていても、落ち着いてきちんと答えていた。原稿があるわけではなく、画面に色々な資料が出てくるのをスラスラと話していたを見て感心した。こんな子どもに育ってくれれば良いなと。何年か外で働いて、10 年後に小値賀町に帰ってきてくれればと思った。あんなことをずっとやっていたら、やはり北松西高校もそれが有名になって深化していけば、自然と生徒も増えるかもしれない。

横山委員： 心配なのは、彼らは特別だと思う。小さい頃から知っているので、こんな風に育つんだなという感覚で見ていたが、やはり保護者の思い入れとかもある。それが次につながって、良い個性を出していけるような子どもが育ってほしいと思う。

町長：中学校で模擬議会をしているが、どんどん良くなって高校に入って、同じように発表すれば、やっぱり深化していると思う。

升水委員：単的に高校生を留学で受け入れているが、できれば中学生や小学生ぐらいから留学してくれれば、一貫教育にもつながる。高校生だけに来てもらってもなかなか一貫教育のつながりというものが出てくる可能性も少ない。

町長：議会では、単的に人数を増やすということで、高校生に特化して、高校生だけ入れれば良いと思っている方も中にいるかもしれないが、やはり中学校からその子ども議会からずっと深化していって、高校であんな良い発表ができる子どもに育てば、社会に出てからすごいと思う。

升水委員：自分達の時代の小中学生は、あんなに喋れなかった。

町長：人前で喋ること自体がなかった。

升水委員：やはり親子留学とか、高校の定員をカバーできるものがあったら、親も一緒に移住してもらうというやり方が一番良い。

町長：離島留学生のＩさんの親が役場に就職した。そうやって、どんどん繋がっていけばよい。

升水委員：町内も人材不足で、一石二鳥で、やはり行政の方で、そうやって盛り上げていって

ほしい。職場も住まいも、そういうサポートもやはりしていかないと。住むところがなかったら誰も来れない。

町長: もともと総合計画は行政だけでやろうと思ったらまずできない。町民の方々も一緒になって町を作っていこうという機運が、どんどん醸成していかないといけないと思っている。総合計画はみんなで作ったのですが、やはり行政が「ああして、こうして」という前に、住民の方々や町民の方々が「ここまでは自分たちがやるから、あとは行政がやってくれ」「ここまでは自分たちができるから」というような、そんな機運が高まってくれれば、「生徒も増えるんじゃないか」と思う。

升水委員:最近見ていると、割と若い人たちが少し頑張っているように見える。

町長: 海岸清掃にしても、何にしてもいろんな取組みをして交流を行ったりして、そんなことをやることが、子どもの数が増えることにもつながるし、町の発展にもつながると思う。

町長:地域探究発表会で高校生が提案内容は、高校生の方から、「提案するけれど、お金とか予算とかが絡むので、あとは役所の方にお願いできませんか」という話があった。もちろんそれはもう良い提案で、今の観光計画にもつながること。今、前期の総合計画があるが、盛り込もうと思っている。観光計画の中にも盛り込むし、総合計画の中にも盛り込んでいこうということで、担当の方には話はしているが、そういう提案されたら、やはり嬉しい。自分たちが「ああやるか、こうやるか」という前に提案してくれる。そういう機運を醸成していかないと何もやるにしても難しいんじゃないかなと思う。昔は昔で、人口も多かったし、子どもも多かったし、何もしなくてもいっぱい人がいたけれど、その時のことはあるかもしれないが、なかなか自分たちで、何でも行政がやってくれるという感覚は昔はあったと思う。私も含めて。それが、みんなで町を作っていこうという機運が醸成できれば、最高だ。

浦委員:留学を受け入れるということは難しいことだが、やはり色々と聞いていると、特化したものがあれば良いのかなと思う。北松西高校の強みというところに挙げられているが、そこを私は売りにしても良いと思う。例えば、高校生が望むその進学先に100%ちゃんと第一志望で通っている。それはもうすごいことだと思う。だから、それを強みとして言っても良いと思うが、でもそれを説明するのに、どういう説明の仕方をすれば良いのか。そこがなんか難しい気がする。小値賀に来たらもう確実に自分の進む道はきちんと保障するというような、それをどういう風な説明をすればそれが分かるのか。

升水委員:この強みを言っても、子どもには響かない。親にはちょっと響くと思うが、子どもに

は響かないと思う。

浦委員:よそだったら、学習塾に行ったり、色々している。だけど、小値賀はそれはいらない。経済的にもゼロ。それで、第一志望に行ける。すごい魅力だと思うが、それをどうしたら良いのか。

町長: この間、東京に行って思ったのは、やはり色々PR しても、なかなか響かないと思った。直接会って喋ることで、聞いてもらえるということを初めて感じた。いつもはもう「ちゃんと行って、PR してこい」と言うけれど、やはりお互いがコミュニケーションを取って話すことで、来てくれるんじゃないかと感じた。東京に行って良かった。

横山委員: たくさんの高校生が来るというよりも、一人でも二人でも良い、来たら分かるよ、というような、特徴のある高校というよりも、自然体で入ってくる、一人でも二人でも、三人でも良いから。それを継続していく、というのが大事なのではないかという気がする。小値賀の場合は、それが大事なのではないか。

町長: 例えば、北松西高校に入学するとかは別として、「夏休みとかに遊びに来ませんか」と言って、「北松西高校に入れ」というのはなかなか誰もいないかもしないが、「夏休みに団体で 10 名様ご案内」という風に来てもらい、気に入らなかったら、それはもちろんのことだが、それで気に入って、入学している生徒ができれば良いということも思っている。

横山委員: 釣り大会に来て、小値賀に来たいという子どももいたと聞いた。

升水委員: YouTube で発信しないといけない。高校生との対談など。

田川班長:今度、ふるさと留学協議会 PJ で説明会用のリーフレットを牧尾儀信会長が中心となって一生懸命作成した。高校にもリーフレットの一部を作成してもらっている。升水委員から YouTube を活用したらどうかという話もあったが、逆にリーフレット等はアナログで直接手に触れるものになるが、それを福岡県内の中学校に配布する予定があると聞いたが、教育委員会の方から状況について報告をお願いする。

坂井係長:これから福岡市内の全ての公立中学校へ郵送する予定としている。併せて福岡市の図書館にリーフレットを置いてもらうようにお願いに出向く予定。

教育長:高校の教頭が東京、大阪の説明会に参加された。町長は東京、私は大阪だったが、

感じたのは「遠い」という意見である。東京の説明会に行った高校生の意見を参考に大阪の説明会では“小値賀”ではなく“五島列島”を前面に出したが、やはり「遠い」という意見がある。本当に目的意識を持って来ている子どもは少ないと感じた。地理的に考えると、東京よりも大阪、大阪よりも福岡の方がいいように思ったのが私の実感。地域みらい留学の合同説明会は来年も参加した方がよいと思っているが、一方で独自に福岡に力を入れた方がよいと考えている。福岡であれば、フェリー太古で行き来できる。福岡にも海無しの自治体はたくさんある。まずは市内を攻めるということだが、そこから郡部や山間地域を狙っていくことは、感覚として有効ではないかと思っている。

田川班長：今回、説明会に参加するのは初めてだったのか。

教育長：地域みらい留学の合同説明会に参加するのは初めてだった。24 日に北松西のオープンスクールがあったが、東京、大阪からは0人、福岡から1組と別に福岡から9月に見学に来たいと 1 組からあっている。東京、大阪は労力をかけた割りには効果が低かった印象である。今田議員からもリーダーシップをとるようにとの意見があり、東京には町長が、大阪には私が参加したが、首長や教育長が参加するアドバンテージは感じなかった。それよりも担当者や高校生の負担が重いので、高校生は最低2人、担当も教育委員会と未来創造課から 1 人ずつ。高校の先生が付く等の体制の方が良いと思った。

田川班長：高校の教頭先生の報告書を読ませてもらったが、今回は高校生が1人ずつで、ひっきりなしに説明をして、休憩する時間も取れなかったので、次回からは 2 人体制で交代ができればよいと書かれていた。

教育長：高校としては、東京に2人、大阪に 2 人は厳しいと考えているようで、東京は諦めて、大阪に2人でと、教頭は考えている。

中村委員：この表でいくと 4 歳児のところの数字。ここが最後の勝負のライン。あとは、10 人以下になるので、令和 17 年の時に、この子たちが高校 1、2、3 年生とかになってくるので、この時に、30 人いるかどうかっていうこと。だから、この時に 1 学年 2 人か 3 人か、1 人留学が来ていると考えて、15人を超えるためには、この子たちに、北松西高校に行きたい、小値賀で大丈夫なんだと思ってもらうことが大事である。一番問題なのは、親が心配になっていることである。北松西高校を出て、世の中に行って、大丈夫なのかと。なんとか、この 10 年で大丈夫だということにしないといけいない。ここまでで成果が出ていないと、この先にやってくる人もいない。小値賀で子育てしようとか思う人とかいない。県でも令和 22 年には 4 割減。多分、小値賀は 4 割どころじゃなく、もっと減ると思う。そうならないためにも、ちょっと増え

れば、プラスにはなる。部活動は小中高で一貫したもので一つにすれば、小値賀でいいんじゃないかと思わせることになるんじゃないかと思う。今、部活動が地域移行になって、指導者の方の手当は 1500 円だったか。

山元班長： 指導者の手当は 1600 円である。

中村委員：地域移行化してくると、手当がなくなって、各クラブから出すっていう話になっている。バドミントン部は年間 3 万円。陸上部は 1 万円。吹奏楽部は 3 人いるが 2 人分はなく、1 人に 5 万円。かなり格安でやっているが、保護者の負担としては、それが限界だと思う。町として、スポーツ委員みたいな感じで雇っていただけると効果があると思う。例えば、役場の職員で部活の顧問としてやって、夜にもスポーツクラブを運営したり、昼間は教育委員会の仕事もしながらのイメージ。地域おこし協力隊とかが近いと思う。自由に動ける中で部活も見ながら、行政の手伝いもするようなイメージ。

田川班長：教育委員会の方からは何かないか。

牧尾次長：やはり、高校の魅力を地域全体で盛り上げていく手立てをして、教育委員会も力を出していかないといけない。小値賀は良いと言ってもらえるように盛り上げていくような気運上昇をしていき、活動なり、施策なり、雰囲気なりが必要だという思いがある。なかなか、出せてないが、そういったところの取り組みをしていく必要があると感じている。

教育長：まとめ的な話になるが確認させてもらいたい。町長と教育委員会としての共通認識のところで、北松西高校の魅力を外に伝えるのが難しい。普通科だが少人数教育で学力は高く、進路保障の実績は充分あるが、それを地域みらい留学の中で感じてもらうのは非常に難しく地味である。探究活動は全ての高校が総合的な探究の時間でカリキュラム化されている。どこでもやっている。派手さを取るのか、実を取るのかというところだが、今の方向性として、小値賀学をしっかり深化させていって、たとえ地味でも特色がある学校が多い中に入っていって目立たなかったとしても、今の推進方向を維持していくというのが、共通認識として図られているかどうかの確認をしたい。

未来創造課長：魅力を外に伝えることは、町として苦手分野でできていないことの一つだが、良いところを伝えて、子どもたちや親に選んでもらうための努力を欠かさずやっていきたいと思っている。

横山委員：余談だが、私が中学生の頃は小値賀が大嫌いで、早く島を出たいと思っていた。

どうにかしてでも島を出るのが目標だった。卒業して小値賀に帰ってきたときに、劇団とんとで塚原さんの話を聞くようになり、小値賀の文化歴史について、どうしてもう少し早く教えてくれなかったのかと言ったことがあった。今現在、教育委員会文化財担当を中心に子どもたちが小値賀学を学んでいるというのが、すぐにはつながらないが、客観的に自分が暮らした地域を見直すという深いところで、高校の魅力化もあるが、人が営みとして小値賀が永遠と続いてきた歴史の中に小値賀があるということを気づくことがいつかあるんだというところで、人として育っていくのではないかと思う。それを見越して、今の子供たちの成長を見ていく。特に思春期ということころを大事に育んでいくことが必要。大人自身も育っていく、学んでいく姿を見て、子どもも成長していくと思う。狭いコミュニティではなく、大きい背景があることが、人を大きくしていくのではないかという気がする。

町長：今取り組んでいる小中高一貫教育が横山委員が言っていることだと思う。とてもよい取組みである。幼い時から自分たちの町を考えることをしてもらえれば、町の活性化につながると思う。

升水委員：小中高一貫教育の地域探究をメインにどういう活動を小学校から高校の発表までしているのかを PR 用に縮小して簡潔にみられるような画像が作れないかと思う。

町長：今度、地域おこし協力隊を１人採用して、情報発信をするようにしている。

田川班長：情報発信については、小値賀町はどの分野も弱い。かといって、職員として一生懸命やろうとしても、なかなかスキルも足らないし、時間も正直ないので難しいところではあるが、今回、地域おこし協力隊で募集をして、情報発信に特化した活動ということで、１ 名を採用し、正式に活動をしていただくことになった。活動していく中で、小値賀町のあらゆる情報を対外的にしっかり発信していくというところに注視して取り組むわけなので、そこは小値賀町の観光だけとか分野を問わず、教育などの色々な情報をしっかり集めて、それを発信するという動きをしていただきたいと思っている。我々が発信する場合に見えない部分があるので、色々とご意見をいただき、また評価していただきながら改善するというのが大事だと思っている。

横山委員：高校3年生の議会発表であれもこれもではなく、コンパクトにテーマを絞ってやっていったというのが、誰でもわかる内容でよく伝わった。高校生だからということかもしれないが、感動した。行政も今年はこれ、来年はこれと絞ってやっていければいいのではないかと思っている。

町長：総合計画にもそのように書かれている。この小規模な財政の中であれもこれもはできない。その時にポイントでやるべきところをやるということを総合計画に示している。できないことはできないと言わないといけないと思うようになった。

田川班長： 情報発信で小値賀町は公式 HP をリニューアルさせていただいた。まだまだブラッシュアップをかけないといけないが、観光サイトの「おぢか島旅」、移住定住に特化した「おぢかる」がある。今年度「小値賀帳」が新たに公開された。これは、小値賀町の人にスポットを当てたサイトとなる。現在は、地域おこし協力隊だけだが、今後はそれ以外の町民も紹介していくことにしている。その中で、小値賀の中でどのような思いをもって、暮らしているのかを知ることと町民が小値賀町に誇りをもって頂きたいという意図がある。今回、それぞれのサイトの担当者が集まって、初めての会議を開催することになった。それぞれの特色をもったサイト運営ができればと思っている。加えて、未来創造課でやっている公式 YouTube も毎月１本をアップするようにしている。

教育長：最後にもう一つ。お願いなのですが親子留学について、この制度設計を今年度するようになっているので、親子留学もご承知の通り、親の仕事と家族で住むところが必要。教育委員会側だけではできないので、プロジェクトの中に民間の方々にたくさん入ってもらっているが、全庁を挙げて、この親子留学の制度設計が進むように、よろしくお願いしたい。

田川班長：親子留学制度の話がありましたが、なかなか整理が難しい制度である。見方を変えれば、親子での移住者とも言える。ふるさと留学で来られた方と移住で来られた方とのすみ分けが必要。それぞれにいろんな支援制度があるので、その整理をしっかりするようにとの意見だと認識している。

教育長：一つの線引きとして、小値賀町で不足している職種、特に専門職である。例えば、来年度の親子留学は枠が何組でその内訳は、介護士や保健師や看護師というふうに決めると自然とそこで線が引けると思う。それ以外の方が来られたら、それは一般の移住であって、親子留学でこういう方に来てもらいたいとすれば、これは親子留学となると思う。

升水委員：私のイメージと少し違う。親子留学という制度ができたら、そこにどんな職種であろうが、親子できたら、その制度を使うかどうかの問題で、職種は限定しない方が良いのではないかと思う。

教育長：地域課題となっている専門職を積極的に確保することにもつながるのではないかと思っている。だからこそ全庁的に取り組む意味があるのではないかと思っている。

田川班長：その辺の整理を教育委員会と未来創造課の担当者レベルですり合わせして、有利な方向、魅力があるような支援ができるような制度設計にしないといけないが、私はまだ整理できていない。

教育長：優先順位をつけないと、あらゆる職種を受け入れるだけの住居の対応ができるのかという問題がある。現実的ではないと思う。特にほしいという職種に優先順位をつけていかないと対応できないと思う。そうしないと、どうやって一般の移住者との区別をするのかイメージが分からない。

中村委員：前の教育委員会で親子留学は難しいというときに教育長が説明したが、私はなるほどと思った。例えば、2組の募集に対して 3 組の応募があった時に 1 組が落ちたが、それでも来ますという方はほぼいないと思う。そういうメリットがないと。

升水委員：親子留学で選定条件を明示するのか。

中村委員：あると思う。住居とかの関係で10組とかは難しいと思う。

町長：住宅の話になるが、水の下住宅については今までの縛りをなくしたので、一般の方も入居が可能となっている。また今後、民間賃貸住宅の建設補助を検討している。

升水委員：町営住宅は空いていないのか。

升水課長：今はすべて入居しており、空いていない。

田川班長：他にご意見はありませんか。
（特になし）

■その他

田川班長：小値賀高校の生徒 18 名が、8 月 16 日から 2 泊 3 日で大阪万博へ研修に行くことが決まった。この研修は、7 月 6 日の関西小値賀会で会員の川村精吾氏（相津、川村泰二さんの叔父）が、ご自身が前回の大阪万博で受けた刺激を生徒にも体験させたいという思いから、費用を全額負担され実現した。参加生徒は、全校生徒 19 名中 18 名で、ほぼ全員が参加する。内訳は女子 12 名、男子 6 名。引率は牧尾教育次長、未来創造課の中

村（女性）、住民課の山口保健師（女性）、JTB の担当者１名の計4名。費用は総額約 260 万円で、生徒一人当たり １2～１3 万円程度の費用となる。生徒の中で、佐世保からの合流者が１名、神戸からの離島留学生１名も含まれており、新大阪で合流して万博に向かう。 今回の万博訪問は、高校生にとって貴重な経験になると期待される。

升水委員：以前の大阪万博は私も修学旅行で行った。高校１年生から3年生の全学年で行った。

中村委員：JTBでパビリオンの予約はするのか。夜中１2時までにネットで予約ができたりする。抽選なので、当選するかどうかが決まる。

田川班長：人数が数日前に固まったので、今後しっかり確認し、事故がないように進める。

教育長：添乗員は女性か。

升水課長：まだ決まっていないが、女性を希望している。

田川班長：他にご意見はありませんか。（特になし）これで令和7年度総合教育会議を終了する。